

喜多尾道冬 Michifuyu Kitao

ヘンデル・フェスティバル・ジャパン (HFJ) によるめずらしいオラトリオ《エイシスとガラテア》の録音。HFJが2003年に活動をはじめ、第一回公演がこのオラトリオだったというから原点に戻っての活動の再確認といった意味合いがあるのか。

イギリスで活躍したヘンデルは当初はオペラの創造に励んでいたが、しだいに軸足を英語のオラトリオに移してゆく。これはその最初の記念的な作品として知られている。

台本はギリシア神話のアーキスとガラテアの恋物語をもとにしたオウイデウスの「変身物語」に由来する。一眼巨人のポリフィーマスがガラテアに横恋慕し、岩を投げてエイシスを殺す。しかしガラテアの願いによってエイシスは河の水に変身して蘇る。美しいニンフと醜い巨人の対比は「美女と野獣」の系統を引き、いにしえから好まれた主題だ。

音楽はいたってシンプル。ヘンデル特有の生命力に満ちたリズムとゆるぎない構築力、簡潔なフレージングと流麗なメロディをもとに曲切れよく展開してゆく。最初のシンフォニアは軽快でスピーディ、はつらつとした生きるよろこびが聴き手に乗り移ってくる。合唱にもそれが感染して、エイシスとガラテアが愛し合う牧歌の情景が明るく広がる。その空気がすばらしい。オーボエ&リコーダーの演奏が錦上花を添え、チェンバロも情景描写に一役買う説得力を見せている。

ガラテア役の大瀧奈緒の声は美しく可憐でよく伸び、牧歌の情景とマッチし、はなやいだ雰囲気を生み出している。エイシス役の辻裕久の声はつやばくみやび、夢のような牧歌の世界を現前させ、ヘンデルのエレガントな一面に光をあて、恋人同士の幸福感がまばゆく放射して聴き手を恍惚とさせる。

そこにポリフィーマスが登場するや情景は一変する。怪物役の牧野正人はすこみの効いた野性味のある声でガラテアを追いつめてゆく。その奔放な生命力のみならず存在感も圧倒的。ガラテアがまるで蛇ににらまれた蛙といった風情をただよわせるなか、武骨な怪物の哀れさ、滑稽さも十分。デイモン役の前田ヒロミツはポリフィーマスをたしなめ教える論ず感じをよく出している。エイシスが死んでガラテアが悲しむなか、彼は河となって蘇り、ふたたび明るい牧歌の情景に戻ってきてガラテアはエイシスと一体化する。その幸せな雰囲気は醸成はみごとだ。これは音楽の勝利であり、また演奏の賜物だ。

石田善之 Yoshiyuki Ishida

【録音評】2011年1月13日、浜離宮朝日ホールでのライブ収録。演奏後のノセの拍手はあっても聴衆のノセのイシはほとんど感じさせないが、ステージ上での調子を練る音などは感じさせる。器楽部分と合唱は実に自然な広がり一体感で、ソロ部分は少々凹凸感があり、ソプラノやテノールは比較的滑らかな印象だが、バスは声量もあり、録音上から傾向のよう。



■ヘンデル：マスク《エイシス(アーキス)とガラテア》(全曲)

三澤寿喜指揮 キャンズ・コンサート室内管弦楽団、同合唱団、辻裕久、前田ヒロミツ (T)大瀧奈緒 (S)牧野正人 (Bs) [HFJ@HFJCD1001-2(2枚組)] オープン価格

堀内修 Osamu Horuchi

オペラでなく、大作でなく、いわゆる名作でさえないかもしれない。だが《エイシスとガラテア》は初演当時から人気を博してきた。その理由がはつきりわかる演奏が聴ける。かつてはモーツァルトの編曲による演奏のほうがなじみ易かったが、いまではヘンデルのオリジナルこそ聴くに値すると思われる理由もわかる。

今年の1月の第8回ヘンデル・フェスティバル・ジャパンで行なわれた演奏のライブなのだが、聴きに行かなかったのが大変残念だと思えた。完璧な出来だということではない。この作品には先行してクリスティーの、それは魅力的な全曲盤も出ていて、それに勝るといってもいい。それでも、外国に比べてひどく遅れているというわけでもない。関心が薄い中で日本のヘンデル演奏が、このような水準であること、喜びたくなってくる意味は大きい。意味だけでなく、演奏の覇気が聴く者に備きかけてくる。

たとえば大瀧奈緒の歌うガラテアだ。愛を失った苦しみのアリアで始まり、死んだ恋人の小川への変身を目前にした痛切なアリアでしめくくるこの重要な役を、歌手はまわがいがなく、握り、表現していた。ライブなのでハッとする時だつて当然あるのだけれど、それもまたこのような作品を聴く楽しみというものだ。

ひとりガラテアではなく、ほかの独唱者たちも、質も高いだけでなく、歌が、なんといふか、よく備わっている。たとえば高音が少々きつくなつても、どう歌いたいのかがまわがいがなく伝わってくるのだ。

合唱団と器楽のアンサンブルについても同様だ。合唱ではクロスとしての役割を見事に果たしていて、悉しみや驚きなどが凝縮あるいは強化されているのが、実にはつきりしている。オーボエのソロだつて、なるほどヘンデルは意味を持った音楽をこしらえる名人だったのだな、と納得できる演奏をしている。

演奏をまとめ上げているのは、フェスティバルの実行委員長でもある三澤寿喜で、まとめ上げる力だけでなく、この作品のヴィジョン、そしてヘンデルのヴィジョンを持っているのがわかる。もう少し細部を磨き上げて欲しいと思うところだつてあるのだけれど、《エイシスとガラテア》の本質的な魅力を伝えた功績は大きい。美しい牧歌劇は同時に愛や美が暴力に屈する残酷な真実のドラマでもあると、飲み込むほかない。